東至二飛狐之岌一。北盡二桑乾之陰一。迄二於句注以東之雄關險塞一。皆恒岳蟠屈廻施之地。是高是之正峰。卽大茂之祖幹。曲陽其趾。阜平其脊。而渾源則巔也。凡此五百里間。何莫レ非二岳靈之所一鍾毓一。而必斤斤焉。執二一地一以辨二其是非一。毋二亦所レ見隘一耶。

と記し、流石に茫洋たる大陸的見解を披瀝して居られる。

⑮「渾源州志」卷二にも亦、これと同樣の記事を揭げ、置二常山關於飛狐岌一と記して居る。然しこれらが根據とするところに就いては手もとに檢索すべき文獻を有せず、其の點嚴正なる批判を經て居ないことを記さねばならぬ。

（一月廿五日記）

神岳・神川・神州

金元の時代、渾源のことを神州ともいつた。今も永安寺には至元三十一年の「□□□住持神州大永安禪寺銘」といふ碑が殘つてをる。金の劉祁の「神川遯士集」（知不足齋叢書本歸潛志の後に佚文を附す）には「遊西山記」といふ文があり、渾源の西、玉泉山に上つて、「北、神州を望めば、掌上にあり、城邑、棋局の如し」と述べてをる。また神川といふのも、當時から渾源の雅名として使はれ、今日に於いてもなほ行はれてゐる。例へば、渾源八景を稱して「神川八景」といふが如く。これは、今日の所謂る北嶽が當時、神岳または神山といはれてゐたことに基くものと思ふ。元遺山の「十三日度岳領」（遺山文集卷十）といふ詩に、「神岳規模亦壯哉」とあり、劉祁の「遊西山記」には、前の文に續いて「東は則ち岳、神山屏の如く、青松翠柏の間、隱々として樓觀あり」と見える。これ、今日の北嶽をさしたものであるが、當時この山を北嶽とか恒山とかいつた例はないやうである。

今日知られた文獻では、北嶽を渾源に置いてゐるのは、「大明一統志」あたりが最も古いのではないかと思ふ。元の「混一疆理歷代國都之圖」では北嶽は今の正定の西北にある。しかし、明の「廣輿圖」になると正定の西北には恒山、渾源の南には北嶽があらはされ、滑稽な感じがする。金や元でも北嶽の祭祀はやはり今日の曲陽で行はれたのであるが、何れの山が祭祀する北嶽の本體であるか、恐らくは漠然としてゐたのであらう。明代、北嶽が今の渾源に定められるやうになつたのは、金元の時代これが神岳といはれたことが直接の原因であらう。古く北魏の時代、玄嶽といはれてゐたことによつても、この山がその地方に於ける山嶽信仰の一中心であつたことは疑ひがないと思ふ。（日比野）